まんが時評

くらさんの目を通して見たちょっと気になる
ニュースにまんがを添えました　　倉林　順一

大阪市立高校バスケットボール部で体罰自殺！

２０１２年１２月のこと。キャプテンだった２年生男子が顧問の教師からの体罰や指導の言葉に思い悩んで自ら命を絶ってしまった。前途ある１７歳。なんと悲しい出来事でしょう。

部活動、特に運動部の指導者によって暴力的な体罰が行われる「事件」がこれまでにも何度も報道されてきました。そのたびに校長や教育委員会は曖昧な説明をしてきたけれど、今回は学校も指導者も体罰と自殺の因果関係を認めた。学校も大阪市長も対策に懸命だ。この悲劇が日本全国の学校での体罰撲滅につながってくれないと若者の死が報われない気がする。

桑田真澄さんの体罰否定論

体罰に愛情を感じたことはない

この悲しい事件に元巨人軍エース桑田真澄さんがＮＨＫのインタビューでとても勇気ある発言をした。私自身が忘れないために紹介します。

「体罰は愛情だと言われるけれど、小中学校時代の練習で毎日殴られていたことに愛情を感じたことはありません。私は体罰を受けなかった高校時代に一番成長しました」。

「体罰は安易な指導方法です。いろいろな角度から説明する指導法のほうが難しい」。

「体罰を生む背景に優勝しないと周りに示しがつかない、首がかかっているなどの事情があり指導者は勝利至上主義に陥る」。

「体罰は『絶対に仕返しされない』という上下関係の中で起きる。監督が采配ミスをして選手に殴られますか。体罰は暴力で子どもを脅して思い通りに動かそうとする卑劣な行為です」。

まったくそのとおりですが、よくそこまで言えますね。桑田さんの勇気に拍手！

体罰では自立心を育てられない

桑田さんは４０歳のときに早稲田大学大学院に入学。精神論によるスポーツ指導の問題点を研究する中で六大学野球選手へのアンケート調査を実施したところ、体罰容認が８３％に及んだことに驚いたという。それに対して「指導者や先輩の暴力で選手生命を失うものが出てよいのか、殴られるのがいやで野球をやめた仲間が何人もいる、スポーツ界にとって大きな損失だ」と鋭く反論します。さらに「体罰を受けた子は、どうしたら殴られないで済むかという思考に陥り、自分の判断でプレーすることができず自立心が育ちません」と言い切る。非常に重要な指摘です。勝利という結果を重視するあまり、「育てる」という大切な使命を教師が忘れては教育になりませんからね。

服従による師弟関係に終止符を！

桑田さんは「アマチュアスポーツにおいて『服従』で師弟が結びつく時代は終わりました。体罰をなくし、勇気を持って今の時代にあった指導法を実践する指導者が一人でも多く出てきてもらいたい」と訴えています。同感です。小手先の対策で済ませてほしくない。